

CONTENTS

自作自演190 立道幸男・市川 司・塩田有紀・鈴木達也 2

第4回 建築家は、リージョンをもつ。
「お店をつくろう! ~小さなまちづくりプロジェクト~」 黒野有一郎 4

特別寄稿 必ず起きる地震と災害に備えよう 〈番外編・戦争〉
戦後70年、平和とは何か 川窪 巧 6

通常総会レポート 牧ヒデアキ・石橋 剛・藤巻志伸・西川光広・相原宏康 8

支部記念講演会「福島いま」一辺見美津男氏 矢田義典 10

特集・連続企画 地域社会と建築をつなぐもの4
若手建築家の意見① リノベーションによるまちづくり 川本敦史 11

JIA静岡発 総会記念講演会 泉幸甫氏「手作り」と工業化の狭間で建築を考える」... 望月美幸 12

JIA三重発 総会記念講演会 日沖正人氏「意識の行き先」 豊田直樹 13

JIA愛知発 住宅研究会「建築家の意伝子」 建築家の視座とレジリエンス ... 関口啓介 14

JIA愛知発 法人協力会主催CPD研修会
環境・エコ・災害対策に向けた各社の取り組みについて ... 酒井良和 15

私の建築修行 Nada,Nada,Nada 大塚一三 16

▶東北からのメッセージ
東日本大震災における建築家による復興支援ネットワーク「アーキエイド」... 犬塚恵介 17

会員のステージ
「世界劇場会議国際フォーラム2015 in 可見」開催 テーマ「社会包摂と劇場経営」... 川本直義 18

Bulletin Board 19

保存情報 第163回 水路の交差点 浅井裕雄 20
横須賀の町割り・町並み 野々川光昭 20

理事会レポート 鳥居久保 21

東海支部役員会報告 村松 篤 22

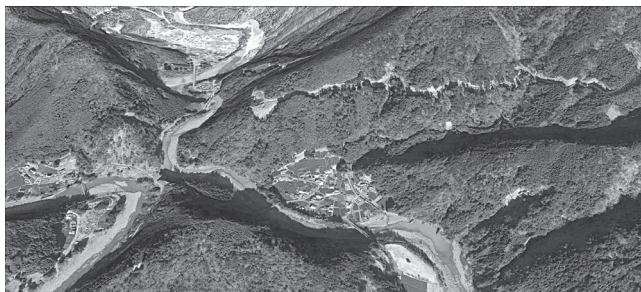
東海とっておきガイド ⑦⑨ 愛知編 竹中アシュ 23

地域会だより 23

編集後記 吉元 学・今井裕夫 24

東海の集落 3

静岡県本川根町大沢地区。新東名、島田金谷ICから大井川沿いを上流に車で約一時間。大井川鉄道のSの終着駅千頭を越え、幹線道路から少し外れた場所にこの集落はある。急峻な山あいを縫うように激しく蛇行する大井川に沿って、茶畑とともに十数戸の家々が建っている。訪れたのはちょうど新茶の季節。気楽に声をかけて下さった茶摘み作業をしていた年配のご婦人によると、一年で最も忙しい季節だそう。ここは川根茶の産地である。集落の風景はその地の産業でそれぞれの特徴が出るもので、茶葉の集落は山の急斜面まで植えられた茶園が美しい模様を描いている。稲作農業、漁業、あるいは宿場の集落とは違う様相である。生まれてこの方この地で暮らしてきたご婦人は、静かでもよいところだよ、また来てくださいね、と優しく言い残して茶畑の中に入っ



Google Earthより

て行かれた。谷あいを流れる立夏の穏やかな風がこいのぼりをゆるくなびかせていた。街とは違う時間が流れているような集落だった。

生津康広
生津建築設計室アーキハウス





立道 幸男 (JIA静岡)

特定非営利活動法人 静岡県建築技術安心支援センター (指定構造計算適合性判定機関)
(静岡市葵区追手町2-12安藤ハザマビル4F TEL 054-275-0030 FAX 054-221-0565)

我が家は兼業農家

我が家は俗に言う兼業農家である。毎年のことだが今年も兄弟の家族、子どもの家族、合わせて30名余りが集まり田植えを行った。御殿場地方は寒冷地のため4月初旬に初まき、5月の連休を利用しての田植え作業が通例となっている。

核家族化された世の中であるが、身内が集まることが少なくなっていることも事実である。

我が家では、正月とお盆そして田植えと稲刈りの時期は、身内が集まり大変な騒ぎになる。迎える我が家は大変だが、兄弟や子どもの家族は楽しみのようだ。30人集まると表は車で一杯になり、約100坪の我が家が狭く感じる。怒鳴る声や子どもの泣き声が響き騒ぎが治まることはない。女房と娘、息子たちの嫁さんは食事の支度や子どもの世話で忙しい1日となり、農作業も大勢の人の手数は有難い。こうして身内が年に何回か一堂に集まることの尊さは我が家にとっては宝であり、誇れる年中行事となっている。

小生も70才、あと何年こういう形で身内が集まるか分からないが、息子たちの嫁や娘婿にも恵まれ感謝している。

ところで、昨年より本業の設計事務所は息子に任せて、現在の役職に就いています。

法改正により今年6月から構造計算適合性判定の申請が直接申請となりました。静岡県内における申請は、ぜひとも当センターをご利用いただきますようお願いいたします。

判定期間短縮とサービスを心掛けて、職員一同皆様のお役に立ちたいと思います。



市川 司 (JIA愛知)

市川三千男建築設計事務所 (名古屋市中区平和1-15-30 TEL 052-618-8211 FAX 058-274-2350)

後進に託す

私は70歳まで4年となり社内の最古参です。引退しなければと思っています。たくさんの人から仕事を教えてもらい、共に建物を設計してきました。仕事人生の終焉が近づいた今でも、判断に迷うことが多くある中、後輩社員に助言をする場面もあります。反面教師とならないように良きアドバイスに心がけていますが評価は…。

上司と社員との関係は、親と子、教師と生徒の関係と似ていると思っています。未熟な子に母親が接する養育の時期、また、父親が忍耐・規範・社会的ルールや道徳を教え、責任感を持って振舞えるように指導する時期です。前者は、新入社員に、後者は技術的な事柄を理解し、判断ができ始めてきた人に対する接し方です。小学校低学年では母性的な部分が多く、中学、高校になれば父性的に接することが多くなり、責任感を持ち、判断できる人に育てて社会に送り出すことと思っています。子どもに対する親の影響力は、年を重ねるとともに減少します。影響力のあるうちに社会人として倫理観を持った人になる様に見守り影響力を発揮するべきと感じています。

後輩には主体性をもって仕事に臨んでもらいたいと思いますが、それには多くの知識と経験が必要となります。その知識は基本の上に積み上がるものです。決してハイテクなものでなく、誰にでもできることの積み重ねです。非凡なことだけでなく平凡なことを続けることの重要性を理解して、すり傷程度の失敗など気にすることなく日々過ごし、それを自分の経験とし、意思と判断で責任を持って行動すれば立派な建築家になれることと思います。

すぐに引退するような文章になりましたが、もう少し仕事を続けたいと思っています。



塩田 有紀 (JIA 愛知)

塩田有紀建築設計事務所 (名古屋市名東区にじが丘2-7-5-103 TEL/FAX 052-783-1339)

気づき、学び、思う

現在JVで設計監理を手がけている工業高校校舎の工事が進行している。

ベテラン建築家、同世代の建築家、そして私、3者の共同設計だ。

JVの一員とはいえ独立以降初めて手がける大規模な建築。木造住宅を主に手がけてきた私に機会を下さった施主の期待に応えるべく、スキルの高いほかのメンバーに助けられながら自分なりに日々奮闘している。

複数の関係者がいる中での議論の仕方、資料整理の方法、形態生成や思考方法の多様さ、素材や使い勝手にまつわる知識など、これまでも他事務所の作品を通じて学んできたつもりだったが、思えば対岸の出来事として楽しんできたに過ぎなかった。『自分の作品としてアリなのか』となると話の緊迫度が違う。メンバーで大いに議論を重ねながら、前に進んできた。

一人で建築をつくっていくこととの一番の違いは、作品の方向性を初期の段階で決定・共有する必要があることだ。

私一人で設計する場合、ぼんやりしたイメージを形にする中でコンセプトが徐々に輪郭をもってくる、その純度を高めることを目指し、中には一定の評価をいただく作品も生まれた。

チームで設計する場合、同じ方向性の中にも個人で考え得なかった可能性の幅が生まれる。その幅を質に変え作品性を高めるためには(この文章を書きながらようやく気づいてきたのだが)メンバー同士が互いの思考をいかに血肉として活かし合えるか、そしてそのための場づくりの重要性を遅ればせながら認識している。

街を歩き遭遇する巨大な建設現場を眺めながら、そこに大勢の設計者が組織立って働く姿があることを思うと、学ぶべきことの果てしない広がりの中にかすかな親しみを(厚かましながら)覚え、街の風景を鮮やかに感じている。



鈴木 達也 (JIA 愛知)

日本設計 中部支社 (名古屋市中区錦1-11-11 名古屋インターシティ2F TEL 050-3139-7300 FAX 052-201-8480)

草食から肉食へ

JIAを病気で2年間休会し皆様には大変ご迷惑ご心配をおかけしました。今回は私の健康回復や自然治癒力向上に役立った「MEC食」を紹介します。高校の同級生である渡辺信幸医師が長年の沖縄での医療活動の中から見出した人間本来の健康的な食事法です。これによって私は自律神経の回復、体脂肪減少、不眠の解消、尿酸値低下、花粉症軽減などさまざまな効果がありました。書籍もベストセラーになっているこの食事法について彼のHPから許可をもらって引用します。

MEC (メック) 食とは

かつて長寿の島と呼ばれた沖縄は昨今肥満と糖尿病の島になってしまい平均寿命ランクも下がる一方です。原因は食生活の“本土化・ヘルシー化”。ご飯(穀物)やおかず(野菜)を中心にした食事、これが実は大きな間違いでした。穀物と野菜では人体の必須栄養素(タンパク質・脂質)は摂れず、炭水化物ばかりを摂ることになります。そのせいで肥満や病気になっていたのです。そこで考えたのが肉・卵・チーズのMEC(Meat・Egg・Cheese)食。1日に肉200g卵3個チーズ120gをよく噛んで食べる。これだけで毎日の必須栄養素をほぼ網羅できます。何かを我慢するダイエットとは違ってしっかり食べるダイエットです。穀物と野菜は禁止ではありません。控えめにすればOKです。

穀物・野菜中心の食事では必須栄養素が全く足りませんが、高タンパク高脂肪のMEC食なら、血液や筋肉や骨になる材料が十分摂取でき、さらにビタミンやミネラルも豊富。乱れた体内機能も修正されるので様々な体質体調の改善に有効です。代謝や免疫力がアップするので病気にかかりにくくなりメンタルヘルスも安定します。肥満の人は自然に痩せてきてメリハリ体型になります。すぐ「MEC食」で検索を!(こくらクリニック院長:渡辺信幸)

「お店をつくろう!~小さなまちづくりプロジェクト~」

黒野有一郎 | 一級建築士事務所 建築クロノ

建築家は、地域へどのようにアプローチして、地域とどのようにかかわっていけるのか?

地方都市・愛知県豊橋市の「まちなか」=駅前エリアと「水上ビル」における10年間の活動を、一例として紹介する。第3回で紹介したアートイベント「sebone(せぼね)」での企画、「まちなかの小学校」向けワークショップ「お店をつくろう!~小さなまちづくりプロジェクト~」と、その端緒となった体験について書く。

小学生が「地域を知る」ためのワークショップ

2004年(平成16年)にスタートしたアートイベント「sebone」については、前回(4月号)で触れた。その中で、僕自身がかかわってきた小学生に向けたワークショップ企画がある。「お店をつくろう!~小さなまちづくりプロジェクト」という。その趣旨として展示会場に以下のように掲げている。

『お店をつくろう!~小さなまちづくりプロジェクト~』展は――

都市型アートイベント『sebone(せぼね)』の連携企画として(中略)、水上ビルを校区にもつ2つの「まちなか」の小学校、松山小、新川小の1年~6年生の全校生徒を対象に作品依頼をし、工作の授業や夏休みのワークショップも行っています。「まちなか」のこどもたちに、「まち」のことをもっと「知ってほしい」、「考えてほしい」というのが、この企画の思いです。ひとつの「お店」が、「まち」の個性をつくり、「通り」の風景をつくっています。みんながつくった「お店」が、この「ちいさなまち」をつくっています。

「まちなか」に育ったという経験は、こどもたちの財産です。

将来、この子たちが豊橋、あるいはそのほかの都市に暮らして、まちづくりや地域社会に関わるとき、この経験がその「まち」を元気にさせるかも知れません。『お店をつくろう!~』は、今後も地域の小学校と連携して、「まちづくり」の小さなタネをまきつづけていきたいと思っています。

小学生の作品として、「sebone」に展示

されたことが発端であったが、もっと面白い展示ができると思い、翌年から引き受けることになった。まず、まちなかの2つの小学校を対象とした。そのひとつは僕の母校でもあり、このときはまだ幼稚園生だったが、娘もいずれこの小学校に上がることになる。

全校生徒が対象で、出展数は500点、1~3年生は絵画、4年生以上は工作で、学年ごとにテーマを設けている。まちなかの小学生だから、家業がお店だったり、おじいちゃんが商売をしていたり、通学路が商店街だったりする環境である。

まずは、自分なりのお店をつくり、その作品を並べることで、街区や通りが形成されて「小さなまち」ができる。展示会場に行くと、ひとつひとつのお店が、「通り」や「まちの風景」をつくっていることに気付くというわけである。観覧する人は「通りを歩く」ことになる。

昨今、小学生に向けての地域イベントは数多く、地引き網や田植えなどの体験や工場見学など、多くの大人たちが地域の小学校にかかわってくれている。ただ、きちんと「地元」や「自分の育った環境」を知るため



チラシ：毎年、新学期が始まると小学校にあいさつに伺い、全校生徒向けにチラシを配布してもらう



リーフレット：学年ごとにお店のテーマを設定し絵や工作でつくってもらう



表彰式：アート賞、建築賞など各賞の審査を担当するアーティスト、建築家、商店街、seboneメンバーが、講評し表彰。各賞に順位はなく、それぞれの視点で個性的な作品を選ぶ



絵画作品は、鮮やかに壁を飾り、工作作品が、街区を形成する



バスや路面電車が走り、観覧する人は道路を通るように、「小さなまち」を歩く



「新川3丁目」「松山4丁目」と学校、学年で町名番地が表される

の企画は意外と少ない。そこで、僕が育ち、娘がこれから育てゆく「まちなか」という環境のことをまちなかの子どもたちに知ってほしいと思った。

今年で10年。初回参加の生徒は、もう二十歳を超えており、娘もすでに中学生になった。蒔いた(ハズの)タネはどこかで芽吹いてくれているだろうか?

里山物語～ 今森光彦さんとの出会い～

このワークショップの端緒となる体験がある。野沢正光建築工房の所員時代、栃木県で絵本作家・いわむらかずおさんの美術館の設計担当となった。那珂川を眼下に望む丘陵地が建設地であったが、もともとは桑畑で、周囲は雑木林や田んぼに囲まれた自然豊かな場所であった。美術館建設をPRするため、出版関係の方々の旗振りで「プレイベント」が企画された。主に写真家や、動植物の研究者などがレクチャーしながら、フィールドワークをしたり、巣箱づくりなどのワークショップを行った。

写真家の今森光彦さんとお会いしたのも、そこでのことだった。代表作となる『里山物語』(新潮社)が「木村伊兵衛賞」を受賞した頃だったと思う。大津郊外・琵琶湖の西岸に広がる棚田や雑木林、それを取り巻く自然とそこに暮らす人や動物、昆虫などが、美しく切り取られた写真集である。その後の「里山ブーム」の発端となり、「里山」という言葉の誕生はここからで

はないか思う。

今森さんの回は、子どもたちと昆虫を捕まえながら計画地を歩いて、その昆虫について今森さんが解説するというもので、参加した子どもたちの半分は東京方面から、半分は栃木近県からだった。どんな昆虫が示されても、名称のみならず、その生態や生息域についても詳しく解説された今森さんの昆虫の知識の深さには驚かされたが、もっと驚いたのは、地元の子どもたちが地元のことを全然知らないことであった。昆虫に触れない子もいた。こんなに豊かな自然が周りなのに、実にもったいないことだとも思った。

1996年頃、20年近く前のことである。阪神・淡路震災以後、自分の周りのことやコミュニティや地域の大切さなどが改めて見直され、それまでの社会のあり方から少しずつ変化しはじめた時期であったかもしれない。この敷地も、バブル時代のゴルフ開発が及ぶことのなかった残された自然環境が、いわむらさんの描く物語のフィールドと同調するというので、ようやく探し当てた場所であった。

このときの、「子どもたちが自分の育った環境のことを知らない(知らされていない)」という体験と気が付きが、豊橋への帰郷、「お店～」ワークショップへとつながっていると感じている。

MY HOME TOWN

今森さんは、大津市内在住で、琵琶湖

西岸の雑木林の中にアトリエを構え、ここを「ホームグラウンド」として、創作活動をしなが、琵琶湖周辺の水郷集落の寄り合いにも足を運んで、まち(むら)づくりに参加し、さらに、自分のフィールドを守るために雑木林を購入するという“一人ナチュラルトラスト”のようなことまで行っていた。その一方で、海外に赴き、アフリカの昆虫やバリの博物標本のお店の撮影をするなど精力的に活動されていた。最近では、「切り絵作家」としての才能も発揮し、里山の暮らしについての著作もある。実にマルチな活躍ぶりである。

片足はしっかりと地元に残し、もう片足は軽やかに自由に踏み出していく。写真家と建築家のスタンスは違うかも知れないが、羨ましいと思った。

今森さんのように「ホームグラウンド」を持ちたい、僕にとっての「ホーム」はどこか?と考えたとき、当時の僕には、生まれ育った豊橋の「まちなか」のほか思い当らなかった。

「君は、リージョンを持つことになるな」。この数年後に野沢事務所を退所する折、この言葉が、故郷へ帰ることを決めた僕を送り出してくれた。

くろの・ゆういちろう | 1967年、愛知県豊橋市生まれ。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。1993年より野沢正光建築工房。「いわむらかずお絵本の丘美術館」「長池ネイチャーセンター」などを担当。2003年、同事務所を退所し豊橋へ帰郷。2004年、一級建築士事務所「建築クロノ」を設立。2014年より豊橋技術科学大学建築・都市システム学系非常勤講師。現在、「大豊協同組合」代表理事、アートイベント「sebone」実行委員長、駅前デザイン会議常務理事・事務局などを務める



●次の掲載は8月号です

〈番外編・戦争〉

必ず起きる
地震と災害に
備えよう

戦後70年、平和とは何か

川窪 巧 | 一級建築士事務所 川窪設計工房

1945（昭和20）年8月15日の終戦から70年。「あなたは勝つものとおもってゐましたかと老いたる妻さびしげにいふ」。歌人、土岐善麿（ときぜんまる）が終戦後に詠んだ歌です。夫が妻にずばりと本質を言い当てられているような情景がよく詠まれていて傑作といわれている有名な歌です。太平洋戦争が始まったとき、ある程度知識のある人々には日米の国力の差からして無茶なことを始めたことはわかったはずですが、それにもかかわらず多くの人は支持した。それにはどのような理由があったのでしょうか、きちんと確かめ検証しておくことが重要だと思います。

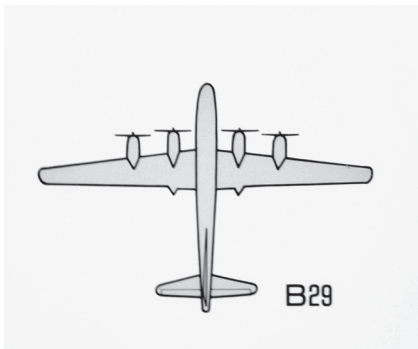


図1 | B29

名古屋市都市センター（金山南ビル：名古屋ポストン美術館）11階まちづくり広場（企画展示コーナー）で毎年、平和について学び考える収蔵資料展があります。そこには250キロ爆弾が展示されます。そこには250キロ爆弾が展示されます。1997年2月20日南警察署の新庁舎工事現場で発見された爆弾で、信管と火薬は取り除かれています。焼夷弾をはじめとして各種の爆弾が本土空襲で使われ、軍需工場では勤労学徒など多くの犠牲者を出しました。特攻機は250キロ爆弾1個を吊り下げ鹿児島県知覧基地から出撃して帰らぬ命となりました。B29爆撃機は大量に爆弾を投下。発見された1個の不発弾から規模の違いを考えさせられます。（※図1）（※写真1）

B29 爆撃機はボーイング

名古屋市見晴台考古資料館にはB29の垂直尾翼が展示されています。小高い丘には日本一の生産を誇る名古屋の航空機製造工場をアメリカ軍の爆撃から守るため、見晴台をはじめ各要所に高射砲陣地が構築されました。当時、瑞穂運動場付

近にB29が墜落したことが分かっています。B29爆撃機の尾翼の一部と推測されるジュラルミン破片が出土したのです。そこには「ボーイング」と記載されています。笠寺陣地北東端にあった「いすず神社」前に、戦利品としてB29のプロペラも展示してあったと伝えられていますが、プロペラは出土していません。（※写真2）

当初、零式戦闘機には痛い目にあったそうです。日本の戦闘機に対抗するためアメリカ軍は1944年6月、空気の薄い1万メートルの高高度でも高出力を維持できるエンジンや与圧室（コクーン：繭）を装備したB29爆撃機で日本本土を初めて空襲。11月東京初空襲。中島飛行機武蔵製作所攻撃、以降から空襲を本格化させました。もともと、マリアナ諸島のテナアン島の海軍航空基地の飛行場は全国の刑務所から囚人を集めて建設にあたった飛行場だそうで、アメリカ軍はこのテナアン、サイパン、グアムのマリアナ3島に日本を襲う「超空の要塞」B29爆撃機の出撃基地を建設しました。終戦まで

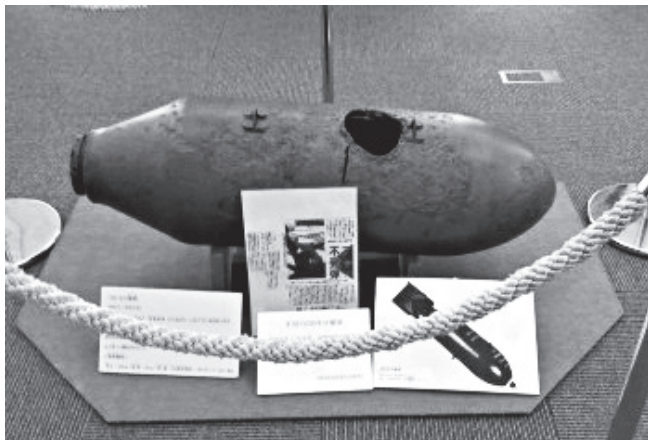


写真1 | 250キロ爆弾（名古屋市都市センター：蔵）



写真2 | B29の尾翼の部分（名古屋市見晴台考古資料館：蔵）



図2 | テニアン島からのアメリカ軍の爆撃ルート

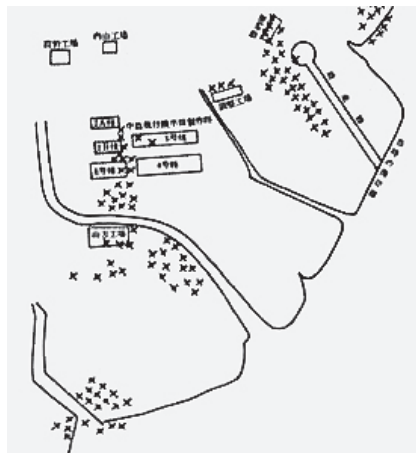


図3 | 半田市の中島飛行機の工場と被爆位置（半田市誌）



写真3 | アメリカ軍が撮影した爆撃位置（左図の右上部分）

に延べ3万4,790機が353回出撃しました。日本空襲の犠牲者（原爆の犠牲者は除く）は30万人から50万人といわれています。テニアン島から硫黄島を結ぶ爆撃ルートが構築されそのルートの先が名古屋となり、東、西と旋回して、日本の各都市への爆撃をしたそうです。（※ 図2）

軍需工場の多い愛知県と静岡県浜松市などでは激しい空襲を受けています。最近でも浜松市で不発弾が出て新幹線がとまるのはそのためです。

1945年3月10日B29爆撃機300機以上が東京都江東区、台東区、墨田区など木造家屋が密集する地域を対象に行った無差別爆撃。焼夷弾を対象地域の周囲に

投下し、住民の退路をふさいだ後、内側を爆撃したため犠牲者は10万人以上とされます。関東大震災で10万人以上の犠牲者が出ている場所でもあります。

名古屋空襲はB29爆撃機約3,000機、投下された焼夷弾、爆弾1万4,000トン、死者7,800人、負傷者1万人、被害家屋13万5,000戸（1944年12月から終戦まで）といわれています。名古屋城が焼失したのも爆撃によるものです。名古屋の街も焼かれました。延焼を防止するため100メートル道路がつくられ、立ち退きをさせられた人々に与えられたのが、南区のゼロメートルの土地で、伊勢湾台風により被災者になられた方々には、ほんとうに慰めの言葉もありません。

日本の戦闘機に対抗するため開発されたB29爆撃機の高高度でも高出力エンジンと酸素マスクをつけなくてもいい与圧室は現在の旅客機に使用されていて、今では海外旅行などで抵抗もなく乗っているのは不思議な感じですが。ボーイング747、ジャンボ機や政府専用機に決

まったボーイング777やボーイング787、ボーイング次世代大型旅客機「777X」は三菱重工業、川崎重工業、富士重工業など5社が機体の生産に参画し生産体制の構築を進めています。

日本の国産大型ロケットは三菱重工業、小型ジェット旅客機MRJ（三菱リージョナルジェット）などものつくりの先端であることは間違いありません。

1944年12月7日東南海地震が起きました。名古屋市港区大江の零式戦闘機を生産していた三菱重工業の工場は液状化により大被害を受け、また半田市の中島飛行機（富士重工業）の工場も倒壊して多くの犠牲者を出しました。その後、爆撃も受けました。（※ 図3）（※ 写真3）その1カ月後の1945年1月13日に三河地震が起きました。疎開していた児童など多くの犠牲者が出ました。（※ 写真4）報道管制をされたため資料が少ない。1945（昭和20）年8月15日が終戦です。

戦後70年、平和ってなんだろう。



写真4 | 三河地震の隆起跡（蒲郡市金平町：金平郵便局跡地）嫁いだ年に平らだった土地がこうなった。生き証人のおばあちゃんと一緒に写真を撮る。1.5m隆起した場所



かわくぼ・たくみ | JIA愛知会員。1947年生まれ。名城大学卒業後、設計事務所勤務を経て、1983年、愛知県岡崎市で川窪設計工房設立。県立半田工業高校、豊橋工業高校非常勤講師

通常総会レポート

4月から5月にかけてJIA 東海支部ならびに静岡、愛知、三重、岐阜各地域会の通常総会が行われた。

●東海支部

5月8日(金)APAホテル名古屋錦にて東海支部の通常総会が開催された。総会に先立ち故・岩崎守会員(静岡)に対して黙祷が行われた。

石田壽支部長(愛知)が挨拶された。皆さまのおかげで1年間務めることができたこと、東海支部の四大事業である「東海学生卒業設計コンクール」「支部設計競技」、東海支部機関誌「ARCHITECT」の発行、「JIA 東海住宅建築賞」、そして「ゴールデンキューブ賞」などの活動を継続的に進めていきたいこと、正会員ルート(正会員はすべて登録建築家に!)の議論もこの先続いていくと思われること、今後も「つなぐ」ということをテーマに、本部と支部、支部と地域会との連携を深め、会員にとっても地域社会にとってもわかりやすいJIAを目指していきたいことなどを話された。

久保田英之支部幹事長(愛知)により開会宣言され、定員数(会員数381名のうち出席者57名・有効委任状168名:会員数の1/5以上)の確認がされ、総会の成立が確定した。服部滋議長(愛知)、議事録作成者:見寺昭彦会員(愛知)、議事録署名人:鳥居久保会員(静岡)、清水一男会員(三重)が選任された。

第1号議案・第2号議案は関連性のため一括で審議。第1号議案2014年度事業報告は石田支部長より説明:建築家資格制度の動き、静岡・愛知・岐阜・三重の各地域会の事業の報告など。第2号議案2014年度収支決算は久保田支部幹事長より説明:全体内容の具体的な説明、全体としては約13万円の赤字。中村久監査(三重)より、適正との報告あり。質疑はなく、第1号議案・第2号議案と



石田壽・東海支部長

も挙手多数で承認された。

第3号議案、その他は会場より意見なしのため抹消。

報告事項として2015年度事業報告について石田支部長より基本方針・事業計画の説明あり。四大事業を行いながら、赤字の出ない事業の運営を目指し、固定費の削減と支部機関誌のページ削減も合わせて、事業が委縮しない支部財政に取り組んでいきたい(支部機関誌「ARCHITECT」の毎月発行を堅持しながら予算削減のために24ページから16ページへ減らし、広報委員会と連携しながらWEBで発信できる部分はWEBにして会報誌としての方向を探っていく予定)。11月に東海支部大会が愛知で行われる(ただ今準備中)。魅力のあるJIAを目指して会員増強を行ってきたい。2015年度予算について久保田幹事長より報告あった。

すべての議案が滞りなく審議・承認され総会は閉会した。

北陸支部近江美郎支部長よりJIA 建築家大会2015金沢(全国大会)の紹介があった。



会場の様子

牧ヒデアキ | 東海支部会報委員長
・愛知地域会プリテン委員長



村松篤・静岡地域会長

●静岡地域会

4月27日(月)ホテルシティオ静岡にて

今年度で就任2年目となる村松篤地域会長は、冒頭のあいさつの中で昨年度の活動を振り返り、建築ウォッチングなどのさまざまな事業を精力的に行ってきたこと、中でも8月のデザインフェア(浜松市にて開催)、12月の建築フェア(静岡市にて開催)では300名近くの一般からの参加もあり、一般市民との交流を深めることができたことなどを報告された。

続いて、会員数68人のうち、出席者22人、委任状提出28人で、定足数を満たしていることが確認され、高田雅司議長によって議事が進められた。第1号議案「2014年度事業報告の承認の件」、第2号議案「2014年度決算報告の承認の件」ともに全会一致で承認された。

その後、村松地域会長より、2015年度の事業計画が報告された。大きなイベントとしては、昨年度実施できなかった東部地域(沼津市)にて、ものづくりをテーマとするフェアを開催することが報告された。また、昨年掲げた3つの基本方針「地域に根付くJIAのあり方」「会員の増強と交流」「市民・行政との情報交換」をより一層推進し、市民にとっても会員にとっても魅力ある組織となれるよう活動を推進していくということが確認された。

通常総会終了後は、泉幸甫氏の記念公演が行われ(P12「静岡発」)、講演会終了後に、講師、来賓、法人協力会員、個人協力会員も交えての懇親会が開かれた。

石橋 剛 | 静岡地域会幹事





水野豊秋・愛知地域会長



会場の様子



中西修一・三重地域会長

●愛知地域会

5月8日(金) APAホテル名古屋錦にて

司会進行は澤村喜久夫総務委員長で、最初に来賓の紹介があり、石田壽東海支部長と鈴木利明次期本部理事候補の紹介がありました。続いて本年度亡くなった会員がなかった旨報告があり、水野豊秋愛知地域会長の挨拶となりました。水野地域会長からは最近の業界に活況が感じられることや、愛知地域会の会員数の微減について話がありました。

司会者から本日の出席者および委任状の数が発表され総会の成立が宣言されました。議長は司会者一任で本田伸太郎会員が選任され、以降本田議長の進行で議案の審議が始まりました。

第1号議案は「2014年度事業報告承認の件」で水野地域会長により2014年度報告が読み上げられました。第2号議案は「2014年度収支決算(監査報告)承認の件」で見寺昭彦総務室長から決算書の説明があり、引き続き服部滋監査から監査報告がなされました。その後議長の呼びかけで挙手多数にて第1号、第2号議案ともに承認されました。

JIAが公益社団法人になってから次年度の「事業計画」と「予算」は報告事項となりましたが、議長の提案で意見聴取が受け付けられることとなり「2015年度事業計画」が水野地域会長から「2015年度予算」が見寺総務室長から説明されました。その後田中英彦会員から若手会員の活用について質疑があり、水野地域会長の応答となりました。

以上をもって、およそ40分の総会は厳粛に進行され、混乱もなく無事終了しました。

藤巻志伸 | 愛知地域会職能・資格制度委員長



●岐阜地域会

4月22日(水)ホテルグランパール岐山にて

岐阜地域会会長加藤幸治氏の挨拶の後、車戸慎夫氏を議長に選出して審議が進められ、会計小塚進氏、加藤地域会長より「2014年度事業報告・収支決算報告」がなされ滞りなく可決承認。続いて「2015年度収支予算案」の説明がなされ原案通り「2015年度収支予算」が可決承認、続き加藤地域会長より「2015年度岐阜地域会基本方針」・「2015年度事業計画案」が以下の通り示され、原案通り「2015年度事業計画」が承認なされた。

<2015年度岐阜地域会基本方針>

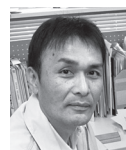
岐阜地域会は、会員の増強に繋がる参加型の継承事業に取り組み、準会員(学生会員)のPRや教育機関へのアプローチも視野に入れ、広く参加機会を増やしていく。

「JIAの窓」(岐阜地域会で活躍するJIA会員以外の建築家との交流の場)を通して一般の建築家にJIAの活動をPRしていく。継続事業として「地域まちづくり事業」を進め、社会性・公益性を活かせる事業を行い、地域に貢献できる団体をめざす。又、本年度より異業種連携支援事業として、岐阜県・県内建築関係団体・学校と連携し、協議会や建築関係団体・学校などの会議・イベントに協力参加していく。その中で、昨年10月に立ち上がった岐阜県住宅リフォーム協議会とのかかわりを考えていく。

加藤地域会長より岐阜地域会の会員減少による厳しい運営状態が示され、JIAの会員として誇りをもって1年間積極的な活動参加を呼びかけられ、総会は終了した。

その後、会場を移し懇親会が催された。会員・協力会員は懇親を深め、最後に岡田典久法人協会会長の閉宴の挨拶で締めくくった。

西川光広 | 岐阜地域会広報委員長



●三重地域会

4月18日(土) 東洋軒にて

通常総会は定例通り開催され、司会は川崎貴覚氏により進められた。開会の挨拶では、中西修一地域会長より昨年度中に行われた事業などについての報告ならびに感謝の言葉があった。来賓にて出席していただいた石田壽東海支部長からは、昨年度より進められている「建築家資格制度」について現在の状況及び今後の予定について言葉をいただいた。

議事については、議長に村林桂氏を選出。議事録署名者に中村久氏、池澤邦仁氏が選任され進められた。司会の川崎氏により会員数31名中出席者15名、委任者5名、計20名により会員数の1/5の定足数を満たしていることが確認され総会成立が宣言された。

第1号議案2014年度事業報告を中西地域会長より説明。第2号議案2014年度事業収支決算報告を西出章会計、監査報告を村山邦夫氏より説明があり順次承認された。

議事が終了し議長が解任された後、報告事項へと続き、2015年度役員など構成報告、2015年度事業報告を中西地域会長、2015年度事業収支予算報告を西出章会計により説明が行われた後、通常総会は閉会となった。総会後には記念講演会が行われ、「三重県の防災対策(地震・津波対策と風水害対策)」について三重県防災対策部次長(災害対策担当)日沖正人氏による講演をいただいた(P13「三重発」)。その後、同会場にて来賓、準会員、協力会員も交えての懇親会が開かれた。

相原宏康 | 三重地域会広報委員長



「福島いま」 — 辺見美津男氏 (JIA 副会長・東北支部支部長)

2012年5月に住宅研究会のメンバーと福島に行きました。それは災害義援金を届けるためのものでしたが、そのときにJIA福島地域会の会員と交流を持ちました。辺見美津男東北支部支部長は当時、福島地域会の会長をされており、お酒を酌み交わしながら仮設住宅のこと、震災復興、福島原発のことなど、いろいろと話をさせていただきました。また、当時完成したばかりの仮設住宅を見学させていただき、深く感銘を受けたのを思い出します。

今回、東海支部総会にて辺見東北支部支部長から「福島いま」と題した講演会が行われると聞き、見学させていただいた仮設住宅の記憶や僕たちが行った、その後の「フクシマ」はどうなっているのかが聞けるのかなと期待して講演会に臨みました。

仮設住宅については、2012年福島訪問時に一部が完成をしていたこともあり、三春町の物件を見学させていただきました。さまざまな難問を乗り越え、福島県産材を利用した仮設住宅は玄関向かい合わせのシェアハウス型で、仮設住宅の概念を変えた素晴らしいものだと思いを覚えました。仮設住宅で感銘を受けたのも変な話ですが、これは仮設住宅に限った話ではないと感じたからです。また、講演会での「生きる力」を信じること、



辺見美津男氏

仮設住宅をつくらない仕組みの考え方など震災体験を通じての話には説得力があり、刺激を受けました。

復興の取り組みでは、福島からの提言「Bigin JAPAN (日本始動)」に共感しました。「弱者をどう助けるか」「まだ見ぬ命に対してわれわれはどう責任を果たすか」など建築家が考えていかなければならない問題に対して真剣に取り組まれているからです。復興への取り組みは被災地だけの話ではなく、日本全体が抱えている問題かと思えます。

また、9尺グリッド(4.5帖)をモジュールにし仮設住宅の再利用の提案も行っていると聞きました。見学した仮設住宅はとても良いもので、仮設利用のみでは残念だと感じていたので、再利用の提案がなされていると聞き素晴らしいことだと思いました。取り組みの中から小さなコミュニティでエネルギーも完結する「自立循環住宅」が実現することを期待しています。そのためには東海支部のわれわれも協力すべきかと思えます。講演会を通じて、JIA東北支部の震災に対する取り組みは地に足のついた活動だなと感じました。これだけの災害を目の当たりにすればそれは当然かもしれませんが、はたして東海支部のわれわれはそんな活動ができていないか、少し見習わなければいけないのかもしれない。

「人としての軸と建築としての軸がブレてはいないか」と講演会の中で話がありま



玄関が向かい合わせの仮設住宅 (2012年撮影)



仮設住宅集会所

したが、これは今建築家に求められているテーマかもしれないと感じました。また、「正しい絶望に希望が訪れる」とも話されていました。「正しい絶望」とはとても難しい感じですが、ふるさとはセイタカアワダチソウが生い茂り、除染土が仮置きされた姿は十分に絶望です。2015年5月12日の中日新聞一面に「浜岡原発維持に年間1000億円」との記事が載っていました。福島での出来事は私たちには関係のないことではなくて身近な問題だと感じながら、福島に明るい希望が届くことを心より願います。

矢田義典 |
矢田義典建築設計事務所



リノベーションによるまちづくり

企画担当：吉村昭範 (D.I.G Architect) アドバイザー：伊藤恭行 (CAn・名古屋市立大学)

事務所を始めて10年になるが、全くと言っていいほど公共建築に興味がなかった。そんな私がプロポーザルについて考えることも失礼と思い、プロポーザルや入札案件以外の地域社会と建築のかかわりを考えることで若手建築家の今後の仕事の在り方を模索していきたい。



私の住む御前崎市は、政令指定都市でもない小さな地方都市である。そんな地域における公共建築の現況を把握するために近郊の市役所をまわったが、どこの市においても老朽化したインフラの整備と自然災害対策など、やらなければいけない多くの事項があり慢性的な財政難が続いている。また、プロポーザルなどの時間と手間の掛かることにチャレンジしながらない役所の気質と縦割り行政がまだはびこっているようだ。この状態から建築の予算を確保し、役所の気質を変えらるとなると市長選に立候補したほうが早そうだ(笑)と思うが、政治家になりたいわけではない。財政難の地方都市に限らず、現在の日本経済を考えても収入40兆円に対して、支出が90兆円、借金が1000兆円になる。家庭に例えるなら、収入400万円に対して、支出が900万円、借金が1億円となる。こんな破綻している財政状況であるからこそ、新しい建築をつくり続けるだけでなく、都市経営が成り立つ儲かる建築の在り方を考えていくことが大切であると痛感している。

さて、具体的に地域課題と建築のかかわりを重ね合わせると、リノベーションによる建築ストックのリサイクルが最適であろうと考える。「低利用となった公共施設」「商店街など衰退が進む中心市街地の再生」「少子高齢化による空き家問題」など、地域社会において解決すべき課題は多く存在する。これらの地域課題を解決するためには、建築ストックをいかにリサイクルするか＝リノベーションによるまちづくりの在り方を模索していくことにつながっていく。実際の事例として、御前崎市においては市町村合併の際に低利用となった旧町役場をスケルトンにして住民や企業に貸し出すことで収益を生む公共施設となるように働き掛けをしている。藤枝市駅前の商店街は、ひとつの店舗の改装に留まるのではなく、多くの店舗オーナーに声を掛け、全ての店舗や道路から街灯にいたるまで共通のデザインビジョンを掲げ、企画やデザインは商店街側が進め、それから市役所と協議しながら助成金を受ける話し合いを進めている。空き家問題に関しては、リノベーションによって資産価値を見出す事例を挙げながら、いくつかの不動産業者と空き家情報のネットワークを構築し、空き家の誘致に対し市

町村の補助金を設け、税金や融資の優遇を図っている。

これらは、住民から発信した地域課題に対し、住民がデザインビジョンと戦略を掲げ、その後に公共がかかわることで、お互いに利益が出る Win-Win の関係性を構築している。

近年は地方都市においても都市問題が複雑化しており、住民の価値観も多様化しているため、住民側から提案をすることで合意形成が図りやすい環境が生まれる。また、住民が地域課題を自らの問題と捉えプロセスを共有することで、長期的なビジョンを見据えながら維持管理ができる仕組みをつくれることが大きな利点となる。何より、公共⇒建築⇒住民というトップダウンの発注形式でなく、住民⇄建築⇄公共においてプロセスのときから対話が生まれることが良い。若手建築家にとっても公共建築のリノベーションという実績が、大きな公共建築への足掛かりとなり、新たな地域社会と建築のかかわり方となっていくことを期待したい。また、これらの地域課題は多くの地方都市においても共通課題であり、JIAを通じて多くの好例を集めて公共や住民たちと勉強会を開いていくのも良いだろう。



最後に、地域社会と建築のかかわりをつくっていくことも大切なことだが、そこには建築が持つ普遍的な存在価値が前提であることを忘れてはいけない。

日頃から、建築とは人々が「集まる場」をつくることではないだろうかと考えている。人は集まり対話したり、食事したり、活動することで多くのことを生んできた。「集まる場」をつくるための建築形式は、モニュメンタルな建築であれ、仮設であれ、リノベーションであれ、屋根だけであろうが、時代や経済を見極め、土地の記憶や環境の魅力を引き出し、「人々が愛着を感じる集まる場」をつくっていくことが建築と建築家の存在意義であると強く感じている。



川本敦史 | エムエースタイル建築計画

泉幸甫氏「手作り」と工業化の狭間で建築を考える」

毎年静岡地域会では、通常総会の日には講演会を開催しています。今年は、建築家の泉幸甫氏をお招きしお話しいただきました。

“手作り”と工業化の狭間で建築を考える”なかなかそそるタイトルです。決して新しい命題ではないのですが、なぜか惹かれてしまいます。思えば、建築界に限らず同じようなことは長い間言われてきました。端的にいうと、人間対機械の構図といった感じです。

今回はぜひ、泉幸甫さんという建築家の口からこの話を聞いてみたいと思いました。泉幸甫さんは気になる建築家です。些細なご縁でお会いしたことは2~3回。菌に衣させぬ物言いで豪快なお人柄と、繊細な作品性のギャップが印象的でした。時代がどう流れようとも、常に批評精神を持ちぶつかった人であり、ずばり“闘う人”という印象でした。

今講演会の1時間半にわたるお話の中でも、建築行為をものづくりとしてとらえ、つくることに本気で取り組み続けてきた姿を伺うことができました。

建築の道を志した20代後半に感じた、設計することは選択することなのかという違和感。そして徹底的に手づくりのものづくりにこだわった時期。しかし時代の流れと共に手づくりにこだわり続けることの

難しさに直面し、徐々に工業化とのハイブリット方式を模索してきた時代があったそうです。そして現在は、工業化（機械化）を使いこなすことにより高みを目指しているということ。根底には、人がものをつくるというシンプルで、ある意味原始的な行為を忘れたくないという強い思いが感じられます。

中でも、最も印象に残った言葉は、「机上で教えてもらった知識と体得した知識とでは智の有り様が違う」という一言です。学校や物の本で学んだ知識と、実際に自ら体験したり職人から教えてもらった知識の違いを指摘していました。まさに、真摯なものづくりに向き合ってきた人の言葉であり、実践主義の泉さんらしい価値観だと思いました。

そして、日本はもとより、世界のあらゆる国々の街や建築を訪れた写真がスライドで紹介されました。東大寺の日干し煉瓦壁、中国民家の版築、モロッコの幾何学タイル、スペインの漆喰壁、ルーマニアの木造建築など…。どれも、つるつるピカピカとは正反対で、ざらざらゴツゴツの手触りの質感。このように、石、左官、木、紙といった昔からある自然の素材をいかした建築は世界中にあります。また、今の時代そういった素材が見直されてきて、自然素材を

ふんだんに使った建築も増えてきました。しかし、素材の魅力を最大限引き出し、ここまで上品に美しく仕上げる建築家は、泉幸甫さんをおいてあまり知りません。

また、泉さんと言えはなんととっても“左官”です。あの陰影と質感のある空間は、左官という素材の持つ力によるところは大きいでしょう。自ら左官材料の配合を試行錯誤し、事務所の屋上で何年も実験をしたお話も出てきました。左官の良さを、今の時代に再評価させた功績は非常に大きいと思います。

最後に、“物と人のかかわりの濃密さ”がこれからの時代を決めていくというお話をされました。今回のタイトルに対する、未来へのヒントになる言葉です。工業化の未来というのは技術進歩のことですからいつの時代も明るい。しかし、手づくりの未来はどうでしょう。つくる人、つくることができる人が時代の流れとともに減ってきています。おのずと、つくりようとする人も少なくなるでしょう。私たちは、機械にできないこと、人でしかできないことを真剣に探っていく努力をする義務があると、改めて痛感しました。これは本当に難しいことです。そのためにはまず、“手づくりの泥臭さ”のようなものを体得していかなければならないのではないのでしょうか。

講演会後の懇親会の席で伺ったところによりますと、かつてとある左官組合からも講演の依頼があったそうです。その講演の謝礼が高級焼酎だったそうで、その粋な計らいを嬉しそうにお話ししていた姿が、泉さんのお人柄を表しているようでとても印象的でした。



講演会の様子



泉幸甫氏



望月美幸 | 望月美幸建築設計事務所

日沖正人氏「意識の行き先」

2015年4月18日(土)にJIA三重通常総会の後、三重県防災対策部次長、日沖正人氏をお迎えし、三重県の防災対策(地震・津波対策と風水害対策)をテーマに講演会が開かれました。

近年、東日本大震災による甚大な被害をはじめとし、大規模台風や頻発する豪雨がもたらす風水害や土砂崩れなど、全国各地において自然災害に見舞われる状況が後を絶ちません。

私たちの地域でも、南海トラフ地震の発生を危惧していますが、大地震に限らず、自然災害の危険性はいつでもどこにでも潜んでいると考え、地域や個人において防災の日常化が大変重要であることを日沖氏は訴えていました。「防災の日常化」のあるべき姿として、住民にとって、防災が「特別なもの」ではなく、日常生活の中に当たり前のように溶け込んでいて、日々の生活の中でいつの間にか災害対応力が養われているような状態を目指しているわけですが、住民の防災に対する意識は低下を続け、定着するまでの道のりを遠く感じているのが正直なところだそうです。

なぜ住民は危機意識を失っていくのでしょうか。決して無関心ではられない課題であるにもかかわらず、任意で防災に取り組むとなると、現生活の優先や対策費用の工面などで、どうしても後回しになってしまうそうです。そのような住民の方々に



日沖正人氏

向けてさまざまな観点から起こり得る災害を予測し、非常に綿密なデータ調査などから被害を想定、提示することで、身に降り注ぐ危険に現実味を帯びさせ、日頃から住民が想像して対応できるように努められていました。

また、住民一人ひとりだけでなく、地域での防災対策にも力を注いでいました。自然災害はいくつもの地域にわたり被害を及ぼします。各々が住んでいる地域の地形や環境を十分に理解し、最良の対策を地域一体となって取り組めるように三重県防災対策部が総力をあげて呼びかけています。しかし、アンケート調査による災害時の避難についての結果を見ると、「しばらく様子を見てから避難する」という回答が過半数を占めているそうです。私見ですが、様子を見るというのはおそらく周囲の行動についてであり、近所や地域の住民で避難を始める人がどれほどいるかによって自身の行動を判断しているのではないかと思います。個々の意識の中で避難に迷いが生じた際に、お互いが判断を委ね合う一種の集団心理は非常に不安定で間違った選択を導くこともあると思います。そのようなことにならないように、地域で計画を立てることで、各自の役割の下、お互いを助け合いながら、迷うことなく避難できる「共助」というかたちをいち早く築き上げることが大切だということでした。

今回の講演を拝聴して私自身も防災への意識が薄れていることに気付かされました。東日本大震災後、私は被災地を訪れる機会があり、そこで悲惨な光景を目の当たりにしました。宮城県南三陸町の海岸沿



講演会の様子

いの住宅地であった場所には樹木や街を形づくるものは何もなく、建物の基礎だけが残り、確かにそこには人々の当たり前の日常があったのだと訴えかけられました。数多くの命と地域の軌跡が失われる残酷さが、私の側に訪れる可能性は十分にあることを忘れないでいようと思っていたにもかかわらず、私の中の危機意識は時間の経過とともに薄れてしまっていました。これを機に、防災への意識を改めて根づかせるとともに、建築に携わる者として、個人の意識の向上や地域での取り組みや対策の力になれるように励みたいと思います。

これからの将来、自然災害を身近に感じるものが幾度とあるでしょうが、芽生える恐怖心は持続せずに、「いつか」に備えるという意識は平穏な日常にろ過され、やがて「いずれ」備えるという意識に変換されてしまうのでしょうか。そしてある日「どこか」で恐れていたことが起こり、恐怖心と共に後悔が還ってくるのではないのでしょうか。当たり前のように悲劇が繰り返されないためにも、防災に対して私たちの意識の行き先が問われているのだと思います。



豊田直樹 | Y's建築設計事務所

建築家の視座とレジリエンス

建築家の意伝子とは、DNAの遺伝子が親から子へと受け継がれるものに対し、ミームとも呼ばれるもので、人々の間で心から心へと伝搬される情報のことを指している。これは社会、文化を形成するさまざまな情報として分析されている。

南川祐輝氏、佐々木勝敏氏お二人を建築家たらしめているその思考、文化などを伝搬していただき、これらが聴衆の心から心へと伝搬されることを期待して「建築家の意伝子」が3月26日に開催された。JIA東海支部事務所でもある会場は椅子が足りず立ち見も出た。学生、若手から建築界をけん引する実力者までみえ、白熱した熱気と緊張感のなかでスタートした。



南川祐輝氏のスライドトークから始まった。福井県の大野市の風景は原風景であるという。大学の師から勧められて桜画廊に通う。美術に触れるようになるが最初はわからず美術書を読みあさったという。

関根伸夫「位相―大地」(1968年)や榎倉康二「壁」(1971年)の写真が映し出された。美術「もの派」に傾倒していく。「もの」と空間との相互依存(作用)関係にひかれたのであろう。南川氏は建築における素材やオブジェクトそのものにはあまり興味がないという。



南川氏トークセッションの様子

卒業設計は自分の内臓をえぐり出すような作業だったという。「自分が自分であるために自分と向き合う」という設計姿勢はストイックであり真剣である。その後社会に出るが就職はしない。以前、新田鷹雄さんの事務所にお邪魔したときに南川氏が見つけた模型を拝見した。

1995年の国際コンペ「水俣メモリアル」優秀賞に選ばれた作品が映し出された。「見えないものを可視化する」というコンセプト。審査講評に「オブジェクトとしてではなく…」その効果が期待されている。

その後実作の写真が映し出されていく。ノブギャラリーで知り合った美術作家のギャラリーが処女作になる。国島征二氏の作品が常設されている「あうら」。美術作品であるアートプラン佐久島の「おひるねハウス」は「水と土と芸術祭」にも招かれている。建築の枠に納まらない活動は、「もの」にとどまらずにそこから発せられる効果を求める南川氏の視座に導かれているようだ。



佐々木勝敏氏のスライドトークは欧州旅行の写真から始まる。大学を出て3か月間欧州旅行に出かける。それまでは建築がバーチャルな存在であったが建築を体感する。しかし、コルビジェやミースがわからなかったという。建築のテーマパーク化



佐々木氏トークセッションの様子

とデコン建築化など問題意識をもって帰国する。

厳しい設計事務所の労働環境にあえて身を置こうと思った。1日300円の食費で身体と頭を鍛えるから心も鍛えられたという。現場では大工さんに脅されたこともあったというが、つくる人がいないと建築はできない」と修行時代を振り返る。

「人工環境と自然の関係を受け止める」「建築を深く考えたい 人のこと 生きること 住むこと」という。その一環として「水曜膳」という食を通じて学ぶ取り組みをしている。食べること、食材を見つめ直す。ものごとや社会が表面的に動いている中で、生きることをリアルに体感させようとしている。「木曜清掃」は自然と向き合う取り組み。ごみ拾いしながら外部空間について考え、環境を考え、社会を考える。社会の縮図が身の回りにあり、問題意識を持たなければならないという。

一つの計画に500案つくる。やれることはとことんやる。学生時代、設計課題は最初はCだったという。デザインは下手でもエネルギーはかけられる。目で見ながら五感全部を働かせる。大事な部分はモックアップをつくる。まるで修行僧のような佐々木氏の活動はレジリエンス(逆境に強い心)に支えられているようだ。



建築を学ぶ若者だけではなく、同じく建築を求める者として共鳴するところも多く、また学ぶことの多いトークセッションとなった。南川氏の視座と佐々木氏のレジリエンスはインパクトをもってわたしたちの心に響いた。



関口啓介 | 人建築事務所

環境・エコ・災害対策に向けた各社の取り組みについて

4月3日(金)アパホテル名古屋錦において、平成26年度第3回目のCPD研修会を開催しました。本研修会は、法人協力会から日頃お世話になっているJIA会員の皆様への認知活動の一環として、各企業から「環境・エコ・災害対策に向けた各社の取り組み」を紹介させていただきました。

<講演企業>㈱イケガミ、㈱岡村製作所、パナソニック㈱エコソリューションズ社
<参加者数>会員28名 法人協会員18名 合計46名



研修会の様子(屋上緑化についての発表)

①㈱イケガミ

【植栽基盤から考える

建築物緑化の環境「環境」

講師：池上 靖幸氏

1990年頃から定着し始めた屋上緑化。当初は緑化面積を補うための手法として注目されていましたが、最近では限られた空間で緑を楽しむために多用されています。

講演では、安全に屋上緑化を楽しむための植栽基盤の要点を「屋上緑化のコスト」「屋上緑化の断熱効果」の2点に絞ってお話ししていただきました。

屋上緑化のコスト面では、「あいち森と緑づくり事業」の助成制度があり、名古屋市では緑化面積×1万5千円以内、工事費の2分の1以内でかつ最大500万円の助成が出ます。

断熱効果の面では、まだ住宅・住戸の外皮性能プログラムには屋上緑化の熱貫流率の参考値は起算されていません。しかしながら、金沢大学や熊本大学などで研究もされています。

また、今年より屋上緑化の環境効果の「熱貫流率」という観点での検証も開始され、今後専門家の助けを借りつつ建築家が「省エネ装置」として積極的に緑化に取り入れられるようにデータの整備を実施されています。この屋上緑化による省エネルギー効果についても紹介していただきました。

②㈱岡村製作所

【地震とパーテーション「災害対策」

講師：小玉 真澄氏、斉藤圭吾氏

近年の震度5～6強の大きな地震では、オフィス内のパーテーションと強度不足の天井が地震の力を伝え合うことで変形、破損、さらに落下するなどの被害が出ています。今回は、阪神、東日本大震災時のスチールパーテーション・可動間仕切りの被害状況と対策について説明いただきました。

被害に及んだ原因として、①揺れに差異が生じた間仕切りが中間構成材として抵抗力となってしまった②間仕切り・天井などの弱い部位に影響が出てしまった③建築内装のデザイン要求から逃げがなくなってしまった④収納庫と間仕切りの耐震連結での不満があった などありますが、設計段階で耐震を考慮されていることは少なく「間仕切りには今以上に耐震性能が必要」とのことでした。そのため、耐震対策が必要な間仕切りが必要なシーン(避難通路・災害時の重要拠点)を紹介していただきました。

③パナソニック㈱エコソリューションズ社

【快適性と省エネルギーを両立させる LED照明の技術「省エネ」

講師：岩井 彌氏

建築における照明の観点から、省エネ

ルギーを実現するLED照明に関する最新技術を紹介していただきました。

講演では、建築における照明の観点で、LED開発の歴史から始まり、青色LEDの実用化により照明用途が急速に拡大し、ノーベル賞につながった経緯を説明されました。

「基礎技術の確立(赤崎氏・天野氏グループ)」「実用化技術の確立(中村氏グループ)」の2点により、基礎技術だけでなく、応用技術も合わせたことが青色LED開発の大きな意義となりました。また、青色LEDの実用化により光の三原色R(赤“Red”)、G(緑“Green”)、B(青“Blue”)がそろい、照明用途が急速に拡大しました。

また、照度だけを頼りにするとLEDは不安になるため空間の明るさ感評価指標の説明と照明デザインについて紹介していただきました。

法人協力会として、今後もCPD研修を開催しますので、会員・法人協会の皆様、ご支援・ご協力をいただきますようお願いいたします。



酒井良和 | ㈱LIXIL 中部支社

Nada, Nada, Nada

大塚 一三 | 河合松永建築事務所

おおつか・かずみ |
1949年名古屋工業専門学校建築科卒業。
染木建設を経て松永建築事務所勤務。
1965年松永建築事務所(構造設計)設立、
代表取締役所長。1968年河合松永建築事
務所設立、1975年より代表取締役所長。現
在 JIA 愛知相談役



私が中学生のとき、アルゼンチンの小学校の課程を経てきてスペイン語ができる友人がいた。戦争が終わり、学徒動員から復学したとき、校舎は空襲で焼け落ちて何も残っていなかった。彼が発した第一声は「nada, nada, nada」(※1)であった。精神科医の堀内秀さんの作家・評論家としてのペンネーム「なだいなだ(nada y nada)」も同じような意味合いだ。名古屋は、今の栄から笹島の東海道線まで見通せたほど焼き払われていた。

翌年入学した名古屋工業専門学校も、やはり空爆を受けて、わずかにRC造本館の躯体だけが残っていた。授業は窓ガラスもない校舎で始められ、十分な専門教育が受けられるような環境ではなかった。図書館も仮の設置でほとんど利用できず、卒業だけを迎えた。実務に関する知識は皆無、こんな状態で就職して仕事ができるのだろうかかと深刻に悩んだことを思い出す。1949年の春であった。

先輩の経営する地元の建設会社に入社したとき、思いもかけずその図書室が整備されているのに驚いた。どうやって収集されたのか、大正末期からの建築・美術関係の雑誌をはじめ、多くの専門書が集められていて、その範囲は大学でもなければ必要とも考えられる範囲、たとえばSuterの『Methode der Festpunkute』やMüller-breslauの『Die Graphische Statik der Baukonstruktionen』などの力学書にまで及んでいた。ほぼ半年間それらを読みあさることができたのは、まったく幸運であった。

10月になって、村野藤吾さんの設計で、すでに工事が始まっていた丸栄ピカデリー映画館の鉄骨を担当することになった。事務所にいる間にF.Bleichの『Stahlhochbauten』を何とか読み終えていたので、臆せず鉄骨工場に出かけたのだが、なんと、使用する鉄骨が戦時中の軍需工場の解体品であった。吹き飛ばしたりベットの孔を避けて、骨組みを再構築するという、現在ではまったく想像もできない作業を強いられたのであった。このような事情は翌年のホテルロビーの建設時には、いくらか解消されていたのだが、当時の鉄骨の価格は4万円/t、朝鮮戦争が始まったとき、いきなり5~6万円/tに跳ね上がった。新入社員の給料では1年分で1tしか購入できなかったのである。このことから考えると、基幹材としての鉄鋼がいかに優等生的に日本の経済の発展に貢献してきたかが分かる。

1950年になって丸栄ホテルの工事が始まった。丸栄百貨店の北館(位置は現在の栄町ビル南西部)を改修してホテルにしようとするものであった。この建物は旧十一屋百貨店の5階建て旧館と7階建ての新館とからなっていた。旧館は1921年に竣工したもので、三浦耀教授(※2)の構造設計であったが、地下1階部分の柱2本に大きくせん断亀裂が入り、大梁との接合面が開いていた。当時の一般的設計がそうであったのだろうか、スラブには下端筋しか入っていなかった。開設されて間もない建設省建築研究所の指導を受けながら、焼けビル補強ということで処理されたのだが、今考

えてみるとこれは1944年の東南海地震での被害であった可能性が濃厚である。

話は戻るが、ピカデリー映画劇場は約750㎡、工費1,400万円、定員580人であった。リバースフロアの客席は村野さんの指導を受けながら油土で何度も模型をつくり検討した。内壁は木毛板の上に1寸角ほどの木材を小間返しにたて張りした質素なものであったが、仕上げのペンキの色には村野さんの執念とも言うべきものがあった。現在の百貨店本館の外装タイルに近い。村野さんがとくに好まれた色であったようだ。ホテルロビーでは、村野さん独特の手法、“面と面(床、天井-柱、壁)を直接突き合わせない”を学んだのは貴重な経験であった。阿倍野の事務所にお邪魔したとき、接客室に面した竹の植え込みを指して、この竹の生え際が大切なのだと懇々と説かれた姿がいまだに思い浮かぶ。

1950年を過ぎて、少しずつ建築事情も改善されていく。1948年には隔月で複巻号であった雑誌「新建築」が各月刊となり写真も徐々に増えていったのは、建築界が復活していったことを反映している。もう少し遅く生まれていれば、もっとよい環境で建築を学べたのにと考えたことが何度もあった。しかし人生も終焉に近づいたゆえだろうか、現在では、これはこれで結構な経験ができたのではないかと考えるようになったのも事実である。

※1 Nada: 英語のnothingに相当するスペイン語
※2 名古屋高等工業学校教授。1920年京大建築学科創設とともに移籍。夫人は、京大で長く講師として美術史を担当した三浦アンナさん

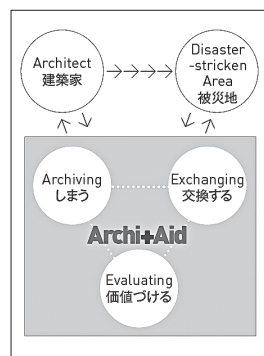
東日本大震災における建築家による 復興支援ネットワーク「アーキエイド」



一般社団法人アーキエイド代表理事 犬塚恵介

東日本大震災から4年が経過し、集中復興期間最終年となる5年目を迎えた。被災地では移転を完了し新たな暮らしを始めた地域もあるが、復興の進捗を被災地全体で俯瞰してみると、原発事故の影響で避難が続く福島県の一部を除いても、住まいの移転のための防災集団移転促進事業（高台・内陸移転）の完了率は戸数ベースで2割前後、土地区画整理事業の完了率は1割にも満たない状況である。また、災害公営住宅は3万戸が計画されているが、完了率は2割に満たず、未だ多くの方が仮設住宅での生活を余儀なくされている。

東日本大震災における建築家による復興支援ネットワーク「アーキエイド」（以下アーキエイド）は、建築家による数々の支援活動を相互にネットワーク化し、①多面的な復興支援・地域振興プラットフォームの構築、②実践的復興教育サービスの開



アクションのダイアグラム

発（人材育成）、③震災知識の集積と啓蒙一、という3つの活動目標の達成に向けて、「しまう」（建築家による復興プロ

ジェクトに関する情報の収集・整理・提供）、「交換する」（建築家、被災地域、学生間のコミュニケーション支援）、「価値づける」（復興プロジェクト、復興計画へのレビューとフィードバック）という3つのアクションを行ってきた。

発災後、多くの建築家はその職能を通してできることを考え、地域に分散して自律的な活動を展開した。アーキエイドのプロジェクトの多くは地域をリサーチすることから始まり、住民と共に地域の将来を見据えた復興ビジョンを描き、今もそのビジョンの実現に向けた活動を継続している。地域ごとの特性を踏まえ、震災前から顕在化していた課題も含めて横断的に解決するボトムアップ型の支援は、建築家という職能の定義を超えた活動にも広がり、地域に即した高台移転地や建築物、未来を担う人材や産業、そして記憶の再生といった、さまざまな姿かたちを成しはじめている。これらアーキエイドの活動詳細は活動年次報告書にまとめており、ホームページ (<http://archiaid.org/books/>) より参照できる。

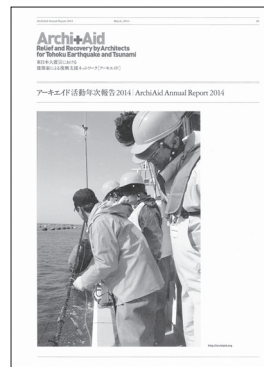
私自身、震災から1年半が過ぎた頃に愛知から宮城に移り住み、アーキエイドの活動を通じて数多くの建築家の活動を目にしてきた。現在、目に見える建築家たちの成果は、活動のほんの一部だけに過ぎない



谷川浜の高台造成工事

だろう。一つひとつの成果が、膨大な労力をかけて成し遂げられる一方で、数知れない失敗がある。私は、この失敗こそが建築家たちの真の成果ではないだろうかと思っている。復興制度、日本の社会システム、現在の社会的価値観など、失敗には多くの理由があり、この失敗の検証は間違いなく今後の社会をつくっていく上で重要な知見になるだろう。アーキエイドは発災から5年というひとつの節目を迎えるにあたり、この知見を次世代へ引き継ぐという使命を果たしたいと考えている。

昨年、政府が南海トラフ地震に対する被害想定を死者数33万人と発表し、10年間でこの被害想定を8割を減らす数値目標を掲げた。8割減らしても東日本大震災の3倍という脅威である。これから本格化する「事前復興」の中で、建築家が果たすべき役割は何なのだろうか。起こりうるトップダウン型の計画からこぼれ落ちていく地域特性やニーズをどのようにしたら拾い上げられるだろうか。建築家の社会への新たなかかわり方を、東日本大震災における建築家による数々の復興支援活動から学ぶためにも、もう一度、東北の現状に目を向けて深く探ってほしいと切実に願うと共に、建築家の職能の可能性に故郷の未来を託したい。



活動年次報告書表紙



AA プロジェクト・南相馬コアハウス



AA プロジェクト・牡鹿漁師学校

「世界劇場会議国際フォーラム2015 in 可児」開催

テーマ「社会包摂と劇場経営」



川本直義 | 伊藤建築設計事務所

JIA 東海支部の後援で、2月13日～14日、可児市文化創造センターにて「世界劇場会議国際フォーラム2015in 可児」が開催された。(公財) 可児市文化芸術振興財団の主催であり、私の所属するNPO法人世界劇場会議名古屋は共催として事務局の一端を担った。

「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」が平成24年に施行されて以来、劇場の社会包摂機能がにわかに注目されている。可児市文化創造センター館長兼劇場総監督の衛紀生氏は、以前から劇場が社会包摂機能を持つべきだと主張し、同センターにて実践されてこられた。その衛氏が影響を受け参考にしてきたのが、英国リーズ市にあるウエスト・ヨークシャー・プレイハウス (W.Y.P) とのこと。今回のフォーラムは、そのW.Y.Pをはじめ英国の地域劇場の経営を知り、社会包摂機能を持つ公共劇場のマネジメントについて考えていこうという企画だった。

そこで、本フォーラム開催に先立ち、NPO法人世界劇場会議名古屋は、英国地域劇場スタディツアーを企画し、昨年6月に英国で社会包摂プログラムを実践している劇場を視察して回った。地域劇場が犯罪者の社会復帰のためのプログラムや引きこもり青少年へのプログラムなどを実施し、誰も排除しない社会づくりに真剣に取り組んでいることを実際に見聞きし大変刺激を受けた。特にW.Y.Pのプログラムに参加していた高齢者の生き生きとした姿が大変印象的だった。

さて国際フォーラム1日目は、文化庁文化部長佐伯浩治氏による特別講演「これからの文化政策」からスタートした。



セッション1の様子

続いて3名の基調講演。英国王立芸術協会評議員のマギー・サクソン氏が、なぜ劇場が社会包摂にこだわるのかなどのお話。続いて同志社大学特別客員教授の佐々木雅幸氏が、創造都市と社会包摂についてさまざまな都市の事例を紹介。最後に衛紀生氏が、劇場・ホールに「文化芸術の社会包摂機能」がもたらす豊かな社会を形成する使命があることを指摘した。休憩後、セッション1-1「地域に生きる劇場とは①」として、英国シェフィールド劇場の最高責任者であるダン・ベイツ氏と英国W.Y.Pの芸術監督ジェイムス・ブライニング氏の講演があり、最後に基調講演者も含めて舞台上に並び、質疑とディスカッションで1日目を締めくくった。

国際フォーラム2日目は、セッション1-2「地域に生きる劇場とは②」として、世田谷パブリックシアターの取り組みを楳屋一之氏が紹介し、可児市文化創造センターの取り組みを坂崎裕二氏が紹介した。その後全員参加で意見交換した。創造の力を地域社会に役立たせ、社会から阻害されている人の居場所となるのが地域劇場には求められており、劇場はだれもが必要とするものだということが確認された。

英国人ゲストを交えてのセッションが終わり、韓国からのゲストを交えたセッション2「舞台技術者の専門家とは」と、我が国の代表的な地域劇場で活動されている市民団体の代表者がスピーカーとなったセッション3「劇場のある町に生きる」が並行して開催され、本フォーラムは終了した。2日間で延べ約500名と予想以上の参加があり、充実したフォーラムであった。



ウエスト・ヨークシャー・プレイハウス (W.Y.P)



W.Y.P ロビーにて高齢者プログラム開催の様子



マギー・サクソン氏とジェイムス・ブライニング氏

東海4県につくられた住宅対象

第3回 JIA 東海住宅建築賞 2015

6月20日 公開1次審査

●主旨：本賞は、愛知県・岐阜県・三重県・静岡県の東海4県につくられた住宅（専用住宅・集合住宅など）を対象とし、各自が定めたテーマに対して特に秀でた住宅に対して贈る賞です。今日、建築家としての社会的な意義が問われていると思われま...

公益社団法人日本建築家協会東海支部では、東海における居住空間の質及びデザインの向上に貢献すべく、本賞を創設しております。プログラム・空間構成・ディテール・環境への配慮・工法などに始まり、様々なテーマのなかから優れた住宅を募集すると同時に、応募者にとって建築作品への建築家同士の批評の場、交流、そして社会へアピール出来る場を提供する事を目指しています。



第2回 JIA 東海建築住宅賞の第1次審査の様子

<第1次公開審査 詳細>

- 日時：2015年6月20日（土）
●場所：名古屋大学ES総合館ESホール
●参加費：無料
●対象：どなたでも参加できます
●審査員：審査員長 | 青木 淳氏（青木淳建築計画事務所代表 日本建築家協会会員）

学大学院教授 日本建築家協会会員

審査員 |

長谷川 豪氏（長谷川豪建築設計事務所代表 東京工業大学非常勤講師、メンドリジオ建築アカデミー客員教授、オスロ建築大学客員教授を歴任）

●問合せ先：JIA 東海支部事務局

（TEL：052-263-4636 FAX：052-251-8495 E-Mail：shibu@jia-tokai.org）

連続環境セミナースタートアップセミナー2

—素材を訪ねるさんぽ—「ふすま」

認定プログラム2 単位申請中

「環境と日本の美意識」。(公社)日本建築家協会の法人協力会員でもある柏彌紙店7代目ご主人尾関和成氏に「ふすま」についてお話をさせていただきます。本物のふすまを見せていただくとともに木造の店舗（明治40年建築）も見学させていただきます。

来年の2月から始まる連続環境セミナーのプレイベントです。環境を技術だけでなく文化や歴史からも考えます。

- 日時：6月28日（日）10：00～12：00
●場所：名古屋市中区橋1-4-6 柏彌紙店前 現地集合
●会費：住研会員、住研会員事務所所員、学生 500円
●申込先：JIA 東海支部事務局
●連絡先：JIA 愛知地域会住宅研究会

募集!

「ARCHITECT」では 随時、会員からの原稿、企画を募集しております

「自作自演」・・・建築・まちについて、また趣味や最近の関心事など
「会員のステージ」・・・JIA以外の会員の活動について
「東海とおきガイド」(おすすめ建築・食)・・・それぞれの紹介+建築写真1枚、食の写真1枚

「ARCHITECT」編集部（建築ジャーナル 山崎）
〒461-0001 名古屋市東区泉1-1-31 吉泉ビル7階
TEL：052-971-7477 FAX：052-951-3130 Eメール：yamasaki@kj-web.or.jp



南郊運河と中川交差点



荒子川公園



荒子運河終点

■発掘者コメント

名古屋市では大正13(1924)年に「運河網計画」というものがありました。中川運河は大正15(1926)年に着工、昭和5(1930)年に完成します。その中川運河や堀川を東西に流す支線で庄内川へ結び、名古屋を縦横無尽に水路でつなぐ計画でした。しかし、輸送手段の変化などで中川運河の完成後、支線の計画は途中で廃止されてしまいました。

Googleマップで名古屋を見てみると、中川運河を横切る水路が幾つか見えます。不思議な感じですが、調べてみると、これが当時の支線跡です。支線は横堀と呼ばれ、小碓・南郊運河、荒子川・港北運河と名前がついていて、

水運の減少で一部埋め立てられ緑地となっていますが、合計で2.1kmほど残っています。

中川運河と横堀は信号のない大きな交差点のようで、完成していたら多くの船舶が注意深く往来していたのかも。荒子川運河のさらに南には名古屋港から堀川へ差し掛かったところに東西に繋がるように支線があり、臨港鉄道の可動橋がある「名古屋港跳上橋」は登録有形文化財に指定されています。現在、橋は跳ね上がったまま保存されています。

中川運河周辺は、工業都市を目指した、名古屋の産業遺構です。都市の表層は時代を反映しながら生まれ変わります。しかし、都市の骨格は長い時間を掛けて築かれ、使われ、取

り残されていきます。本来の意図はなくなっていますが、変わらない景色として眺めていたいものです。産業遺構のモノたちの新たな価値を見つけ、生まれ変わらせる必要性が見えてきました。



浅井裕雄 | 裕建築計画



明治26年建築の酒屋 名雄屋



明治7年建築の商家



当時の町割りの姿を残す路地



江戸時代の町割りが残る地域 (太線部は筆者書き込み)

■発掘者コメント

横須賀地区は1666年二代尾張藩藩主徳川光友が横須賀御殿を造営し、この地を訪れたことから横須賀町は町方と称され、これまでの漁村から、城下町としての扱いを受け商業の町として繁栄した。当時は海岸線が近く「臨江亭」と呼ばれていたこの御殿は、光友の死後取り壊されたが、1783年に知多西浦73カ村の行政の中心となる代官所が跡地に建てられた。以後、知多の政治・経済・文化の中心地となり海運でも繁栄し、ちょうどこのころ愛宕神社の例祭で知られる「横須賀まつり」が始まったとされ、現在も変わらずに継承されている。

そして明治以降の近代化とともに銀行・商店・駅などが開設され商業地区として発展した。

この地区の保存の特徴は、繁栄の時代を今に伝える商店や民家などの古い建物のほか、江戸時代の町割りがそのまま残っていることが挙げられる。愛宕神社から南へ向かう道と、その道から東西方向に道幅一間ほどの狭い路地が幾重も繋がっており、その多くの路地が現代の生活の中でも残り利用されている。しかし建築基準法において道路中心から2mの後退を求めていることから、新しい建物が建ち並ぶ通りでは路地景観が壊されつつあるのが実情である。古くからの路地部分の明示や

後退した部分のつくり方の検討、京都の道路後退緩和事例などを参考に、防災や緊急車両などに対処しながら歴史的街路の保存を沿道の住民と一緒に考えていく必要性を感じる。

所在地：愛知県東海市横須賀町三ノ割 他
年代：江戸時代～昭和初期
アクセス：名鉄「尾張横須賀」駅、徒歩5分
参考資料：東海市・横須賀文化の香るまちづくり基本構想



野々川光昭 | オウ環境設計事務所

「全員登録建築家」は「努力義務」の方針

本部理事 鳥居 久保



第225回理事会は2015年3月18日（水）13時30分～17時まで建築家会館1階大ホールで行われた。出席者は会長以下、理事20名、監事2名、事務局2名、欠席理事4名。

【審議事項】

1. 入退会承認の件

1) 新規入会希望：正会員11名、準会員：ジュニア2名、学生1名 協力会員：法人4名、個人1名 種別変更：ジュニア→正会員1名、正会員→シニア1名、正会員→個人協力1名 退会希望：正会員12名、法人協力6名、死亡退会2名

以上、承認。

2) 会員数4,092名（3月18日現在）

2. フェロー会員推奨承認の件（道家フェロシップ委員長）

中国支部より推薦のあった柳氏が逝去。よって49名のフェロー会員を承認。フェロー会員とは後進を育て、尊敬の対象となれる人物像を持つ。今回は寄付の要請は見送る。正会員への種別変更に伴う入会金は徴収しない。

3. 委員会規程改正の件（上浪総務委員長）

常置委員会、全国会議の委員数の上限を13名とする。（特別委員会を除く）

4. 公益事業委員会委員承認の件（赤羽公益事業委員長）

委員会規程8条により、関東甲信越の慶野委員を承認。

5. JIA保存再生会議・JIA建築相談会議委員承認の件（筒井専務理事）

保存再生会議からの委員数案が理事会に諮られた。13名を上限とする案で決着。JIA建築相談会議委員は承認された。「JIA修復塾」をJIA保存再生会議のワーキンググループ化することは不適当とした。今後適当な部署の管轄を検討する。

6. 2015年度事業計画および予算の件（筒井専務理事）

内閣府に提出する。会員数減少で厳しい状況。公益比率は61.1%（前年63.0%）。各支部事業計画、予算承認。

7. 就業規則改定、定年後嘱託者再雇用規程およびパートタイマー就業規程制定の件（上浪総務委員長資料）

- ・ 労働関係法令の改正に伴い本部事務局の就業規程を改正、制定する。各支部の対応については本規程を参考とされたい。
- ・ 就業規則（改正）、再雇用規程（新設）、パートタイマー規程（新設）について

職員種別は正規、嘱託、パートタイマーの3種類。（8条）2か月の試用期間を経て正規職員となる事ができる。（17条）休日出勤は振替え休日で対応。（30条）（再雇用規程3条、4条）（パートタイマー規程3条）定年は60歳。65歳まで1年以内の契約期間で再雇用が可能。（27条）年俸制で対応。給与体系はこの規程が承認後、制定の運び。若干の確認事項と整理を残しているが、承認とした。

【報告事項】

1. 会員種別変更に伴う入会金取り扱いの報告（上浪総務委員長）

準会員から正会員への会員種別変更に伴う入会金の免除を総務委員会が報告。また、準会員からの会員種別移行は支部、地域会の判断に委ねられるが、一旦会員になった以上は改めて入会金は取らない基本姿勢を確認した。

2. JIA建築家大会2015金沢について（近江北陸支部長）

金沢での全国大会について近江北陸支部長より日程などの説明。

3. JIA建築家大会2016開催について（事務局）

関東甲信越と近畿の両支部で開催を検討。

4. 準会員の本部経費について（事務局）

事務管理費の中で会員証発行経費が計上されているが、現状では会員証を発行していないので、その分の経費は計上しない。よって合計は1,280円として訂正する（現在専門、シニアは80人）。

5. 活動および業務執行状況報告（筒井専務理事）

① 公共建築発注方式の多様化への対応（公共建築設計懇談会・東京都）

デザインビルド（DB）は現在国交省、東京都を中心に運用事例が増えている。また市町村にも運用の動きあり。全国に伝播すると公共発注そのものが変わる。JIAとして一貫した対応をする必要性あり。東京都…財務局から文書で都の見解が示された。「DB事業者から、独立している設計者とともに、都は監理・マネジメントを行い発注者責任を果たす。」

② 改正建築士法の普及活動等に関する報告

2/25、自民党の建築設計議員連盟総会の場で、建築3会が改正建築士法の普及と円滑な施行を目的に一般消費者（建築主）への周知徹底を要望した。

③ 建築家資格制度に関する報告（大澤委員長）

<全員登録建築家を制度化するにあたり課題>

登録建築家の義務化には定款改定が必要。よって「努力義務」とする方針。70歳以上の会員のCPD単位数軽減措置を検討中。HP上に意見箱を置いて意見を聴取。公共建築協会の設計者情報（PUBDIS）において、登録建築家が民間資格として認められる可能性が浮上している。

④ 2015年度役員候補者選挙報告

無投票で候補者が決定。今後、総会での承認を経て、決定。

⑤ 2014年度第三四半期決算報告

公共比率56.9%（昨年度同時期54.0%）。

⑥ 2014年度決算見込み報告

会費収入1億7,822万円（予算の645万円減）の4割が支部運営費に回される（7,128万円）。退職金積立金を使ったため、新たに750万円を積み立てる。収支決算は+300万円程になる予定。

⑦ 後援名義承認の報告（会長専決事項）

7. その他

- ・ 仙台で国際世界防災会議が開催され、建築5会がシンポジウムを行った。
- ・ 未納者リストの中で滞納者で資格喪失を出さないためにも対策をお願いする。

東海支部役員会報告

早いもので、静岡の地域会長就任から1年が経とうとしています。最初は慣れない役員会でしたが、徐々に肩の力が抜けて議論に加わることができるようになってきました。本部では「正会員は全員登録建築家」に関して検討課題と方針が出される中、支部では財政の基盤を整える目的で活発な意見が出されています。今後の方向性を見極める大切な事項ですので、各地域会の実情を把握しながら静岡代表としての意見を申し上げていきたいと思っております。2015年度は、愛知で支部大会が開催される予定で準備が進められています。4地域会を繋ぐ重要な大会ですので、皆様奮ってご参加ください。

村松 篤 | 村松篤設計事務所



日時：2015年3月27日（金）16：00～18：30

場所：昭和ビル5階 JIA 東海支部会議室

出席者：支部長、幹事10名、監査2名、オブザーバー 9名、顧問1名

1. 支部長挨拶

支部総会に向けて、議案書の協議をよろしくお願ひします。

2. 報告事項

(1) 本部報告

①第225回理事会 (3/18) (石田) ※P21「理事会レポート」参照

②第20回 フェロシップ委員会 (3/13) (谷村)

会費規定によると、名誉会員でかつ正会員であれば会費は徴収する。

③職能資格制度委員会・建築家資格制度委員会合同委員会 (3/26) (植野)

建築家資格制度規則についてはUIA基準に合致させるための改正案を協議中。JIAのHPに「正会員は全員登録建築家に」のご意見箱を設置。

④第12回 本部広報委員会・第6回 支部広報委員長会議 (3/17) (奥野)

次年度から支部行事をPDFでHPに掲載予定。HPで正会員の申込フォーム作成中。JIAロゴ運用基準については保留。JIAリーフレットは印刷依頼済み。JIAマガジン主催の連続フォーラム「設計業務の激変」に登壇してほしい人を募る。四会連合協定の設計・監理業務委託契約書と小規模向け契約書の改正を受け、既存のJIA版は廃止したい意向。

⑤CPD評議会 (3/25) (塚本)

本部持ち出しCPD評議会が九州支部で行われた。(九州支部長・地域会長も出席)

⑥建築相談会議 (3/10) (竹中)

建築相談の規約について、相談対象などの変更を議論。全国大会にて会議を開催予定。

(2) 支部報告

①正会員 退会届「伊田賢二」(水野)「吉田昭夫」(車戸)

②シニア会員種別変更「大石博司」「大石郁子」(村松)

③東海支部総務委員会 (3/25) (奥野)

地域会運営費の未納者への対応を受けて、支部会費の検討や地域会における罰則規定を協議。

固定費削減について、さまざまな案が出された。準会員・協力会員の会員証発行を協議。

④東海支部建築家認定評議会 (3/7) (鈴木祥)

新規申請者1名と更新43名が承認。死去・退会などによる未更新は9名。

⑤東海住宅建築賞2015 (吉元)

一次審査は6/20、二次審査(現地審査)は7/23、24、表彰式は10月頃の予定

⑥東海卒業設計コンクール2015 (吉川)

3月末応募締切、4/18一次審査、5/30公開最終審査・講演会・表彰式

⑦支部大会について (谷村)

候補地はTV塔(11/13仮予約済)、4/23(木)15:20～支部大会準備会を予定

(3) 各地域会からの報告(各地域会長) ※P23「地域会だより」参照

1. 審議事項

①正会員 入会届「大川孝信」「佐藤隆史」「鈴木俊之」(村松)：承認

②ジュニア会員 入会届「米田雅樹」(中西)：承認

③協力会員 入会届「石黒久雄(個人)」(村松)：承認

「植村産業株式会社(法人)」(村松)：総合建設業を取得されているかを確認のこと。保留

④後援名義 2015年度 第1回CM講演会「CM認知元年---変わる建設マネジメント」(一社)日本CM協会(久保田)：承認

⑤後援名義「世界劇場会議 名古屋フォーラム2015」特定非営利活動法人 世界劇場会議名古屋(久保田)：承認

⑥準会員・協力会員の支部経費及び、報告事項の確認内容(久保田)：機関誌費用を4月から2,000円/人を地域会から支部へ支払：承認

2. 協議事項

①支部総会議案書について(久保田)：4/5までに支部へ訂正連絡

3. その他

①2014年度 正会員会費未納について(石田)：6月末までに支払うよう各地域会から連絡

②東海支部 災害対策委員会発足について(石田)：本部の災害対策委員会は3月末で解散

4月から全国会議発足。標記の委員を各地域会から4/15までに選出のこと。災害対策支援ネットワークにも地域会長と委員の携帯番号とメールアドレスを連絡のこと。

《監査意見》

山田：建築家資格制度の方針について決定していくように望む

中村：4/15支部監査。総務委員会には愛知地域会を含めて協議を。ポートフォリオに関して組織事務所所属の場合は担当であるかをチェックされたし。



未知との遭遇？

私の建築、として思いつくのはこれかなあ。ある日ばったりこれに遭遇しました。電柱をそのまま柱に転用しています。それだけでもすごいんですが、よく写真をご覧ください。一番前の柱は本物の(?)電柱で、それにつながるようにして他の柱が立てられているんです。何か美学をここから感じ取ったのは私だけでしょうか。しかも後ろの電柱からも電線伸びてるし。何だか、現実とフェイクの間を行ったり来たりしている



所在地：名古屋ドーム付近かも

というか、想像を超えた何かがここにはあります。会社の倉庫か何かとして使ってるようなのですが、今でもあるかなあ、取り壊されなければいいのだけど。名古屋ドームからそれほど離れていないところにあっと思ったと思います。

私のお昼、とり天井！

非常勤講師で3つの大学に通っています。お昼時にかかることもあり、学食のお世話になることもしばしば、というよりはすでに楽しみの一つにもなっています。価格が安くボリューム、若干油物が多いのは難点ですが、いつもおいしくいただいています♪

どれも甲乙つけがたいのですが、特にオススメと言われている思いつくのは中部大学の「とり天井」。写真のそれなんですけどね、見ているだけで思わずヨダレが…。あつごはんの上に千切りキャベツ、そこに甘味のタレがかかったとり天ぷらが乗ります。マヨとゴマはかけ放題！カロリーは気になるんですけどね。それでもついつい食べに行ってしまう。どうしよう。



中部大学：愛知県春日井市松本町1200番地

地域会だより

<静岡>

- 4/2 4月臨時役員会
- 4/7 監査
- 4/16 4月定例役員会
- 4/27 通常総会 建築家講演会「手作りと工業化の狭間で建築を考える」
講師：建築家 泉幸甫氏
- 5/21 5月定例役員会
- 6/17 6月定例役員会
第1回プロフェッショナル講演会
第1回建築ウォッチング「浜松市松韻亭」

<愛知>

- 3/26 住宅研究会 スライドトークセッション 建築家の意伝子
- 3/30 総務委員会 (※詳細はP14に掲載)
- 4/3 役員会+CPD講習会
- 4/6 建築八団体連絡会議
- 4/9 支部大会実行委員会 第7回
- 4/13 (愛知県建築士事務所協会 建築賞選考審査会)
- 4/14 監査 総務委員会
- 4/16 住宅研究会
- 4/17 役員会
- 4/20 (高蔵寺ニュータウン コンベ審査会)
- 4/24 (積算協会中部支部総会懇親会)

- 4/28 総務委員会
- 4/30 支部大会実行委員会 第8回
- 5/8 愛知役員会・総会、支部役員会・総会、講演会、懇親会
- 5/30 東海学生卒業設計コンクール第2次公開審査・講演会
- 6/7 東海住宅建築ツアー 「そうだ三河、行こう」
- 6/8 JIA全国住宅部会連絡会議 9:00～11:30
- 6/12 素材を訪ねる旅～もっと知りたい三州瓦～
- 6/20 JIA東海住宅建築賞 第1次公開審査
- 6/28 素材を訪ねるさんぽ「ふすま」(※詳細はP19に掲載)

<岐阜>

- 3/16 第8回 役員会
場所：ハートスクエアG 小研修室2 総会前準備について
- 4/22 通常総会・懇親会 17:00～20:00
場所：ホテルグランヴェール岐山
- 5月 第1回役員会 19:30～21:00
場所：ハートスクエアG 小研修室2

<三重>

- 4/10 監査・第1回役員会
- 4/18 通常総会
- 5/9 事業役員会
- 5/15 第2回役員会、第1回例会
- 6/19 第3回役員会、第2回例会、会員研修会

弔りこころ、大切な葬儀

葬儀のこと、お応えします。

古くから受け継いできた葬送という文化、
弔うことを今も大切に伝えます。
信頼と真心の葬儀で137年。
一柳葬具總本店

いちやなぎ斎場は、365日・24時間、
いつでも病院・施設等から直接入れます。

いちやなぎ中央斎場

名古屋市千種区千種二丁目19番1号
TEL (052) 745-1212

いちやなぎ野並斎場

名古屋市天白区野並三丁目538番1号
TEL (052) 899-0111

◆葬儀のお申し込み◆お問い合わせ◆事前相談は

TEL.052-251-9296

365日・24時間 一柳のスタッフが対応いたします!

日本建築家協会東海支部 特約店

創業137年の伝統と実績



株式
会社

一柳葬具總本店

<http://www.ichianagi-sougu.co.jp>
名古屋市中区栄三丁目14番11号
TEL (052) 241-0658 FAX (052) 263-1310



編集後記

●「JIA MAGAZINE」5月号に本誌の紹介記事を書かせていただきました。会員の意見が載る紙媒体を持っていることの重要性について述べています。お読みいただければ幸いです。

5月8日に東海支部の総会が開催されました(本誌P8)。終了後、辺見美津男東北支部長の「福島のいま」と題した講演会がありました(本誌P10)。震災復興にあたってのご経験より「今後は建築家の職能は建設行為よりも事前のカルテづくりに軸足が移っていく」「正しい絶望に希望が訪れる」などなどの貴重なメッセージをいただきました。文字では限界がある「生の声」の重要性を痛感しました。感動した会員も多かったと思います。しかし、文字には文字でしか伝えられないこと、書くことによって本人の思考を整理する効用があると思います。辺見さん

から毎月「ARCHITECT」に目を通しているとの言葉をいただき大変嬉しかったです。

懇親会では廣瀬高保愛知建築士会会長から「最近の社会の大手志向」についてのお話がありました。共同体が消えていく現代社会では、建築家個人の集まりであるJIAは今後「相互扶助」の一面を強くしていく必要性を感じました。(吉元 学)

●このところ、建築をとり巻く状況が、自分の考える建築の理想と乖離しつづけるなかで、自分の言葉が見出せないというのがいまの小生の後記である。データ発掘(お気に入りの歴史的環境調査)は、その企画や身近な環境への熱い視線がうかがわれて、水路の交差点(浅井裕雄氏)、横須賀の町割り・町並み(野々川光昭氏)ともに興味深く読ませていただいた。こうした日常的で魅力的な場所へのわたしたちの眼差しと思いが、実はその都市の記憶を支えているのであり、都市の魅力の本体なのである。その魅力

への接近と検証と再評価が今後ますます期待される。わたしたちの住む身近な町の一隅で、こうした環境の魅力を発掘し続けることを、劣化の一途をたどりつつある環境状況の歯止めの契機とすることが、ますます重要であると思われます。(今井裕夫)

ARCHITECT

第321号

発行日 2015.6.1 (毎月1回発行)

定 価 380円(税込み)

発行責任者 石田 壽

編集責任者 牧ヒデアキ

編 集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
建築ジャーナル内
ARCHITECT 編集部

名古屋市東区泉 1-1-31 吉泉ビル 703

TEL (052) 971-7479 FAX 951-3130

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

<http://www.jia-tokai.org/>